

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 14 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320093

研究課題名(和文) 中国国内における日本語学習者の縦断的中間言語コーパスの構築と動詞の習得過程の解明

研究課題名(英文) The development of the interlanguage corpus of Chinese speakers learning Japanese in China and the investigation of their verb learning processes

研究代表者

杉村 泰 (SUGIMURA, Yasushi)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：60324373

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円、(間接経費) 3,930,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトでは次の二つの研究成果を得た。第一に、中国の湖南大学で日本語を専門として学ぶ中国人日本語学習者の会話および作文を94名分収集し、学習者中間言語コーパスを作成した。第二に、中国語を母語とする日本語学習者の単純動詞、複合動詞、漢語サ変動詞、テンス・アスペクト、数量詞表現などを分析した。その結果、中国語話者は自動詞・他動詞・受身の選択において人為性の関与を重視すること、漢語サ変動詞の習得において非対格自動詞の方が非能格自動詞よりも習得率が悪いこと、テンス・アスペクトの習得において普遍的プロセスを母語の転移が後押しする形で進んでいくと考えられることなどを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This project accomplished the following two things. First, it constructed the interlanguage corpus consisting of conversational and compositional data collected from 94 Chinese speakers majoring in Japanese at Hunan University in China. Second, it investigated the verb learning processes of Chinese learners of Japanese focusing on simple verbs, compound verbs, suru-verbs of Chinese origin, tense and aspect, expressions with numeral quantifiers, etc. Results revealed that Chinese learners of Japanese choose intransitives, transitives, or passives on the basis of the extent of human agency, and acquire unergative suru-verbs of Chinese origin earlier than their unaccusative counterparts, with their tense-aspect learning process exhibiting strong universal tendencies as they are enhanced by first language transfer.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：第二言語習得理論 中間言語コーパス 中国語話者 日中対照研究 動詞 日本語教育 国際研究者交流 中国

1. 研究開始当初の背景

本研究は中国語を母語とする日本語学習者における動詞習得について分析し、誤用の原因を明らかにし、日本語教育へ応用することを目的とするものである。

日本語の動詞および動詞に関連する格やテンス・アスペクトなどの習得研究は従来盛んに行われている。しかし、学習者の母語や目標言語である日本語における文法的特徴に関してはあまり深く分析せず、誤用の頻度を数字で示したに過ぎない研究や母語の影響を過小評価する多い。

しかし、学習者が母語と目標言語の類似性や母語の構造の有標性をどう認識しているかが、実際に転移が起こるかどうかに影響することを示した研究 (Kellerman, 1983) や、普遍文法の枠組みで母語と目標言語のパラメータ値の違いや、肯定証拠のみで学習可能であるかという観点から母語の影響を検証する研究 (White, 1991) もある。これらの研究は、転移の選択性 (母語の転移は起こる場合と起こらない場合があること) を説明しようとするもので、注目に値する。現在の第二言語習得研究では、母語の影響は第二言語習得の重要な要因の一つであると考えられており (Odlin, 1989; Lightbown & Spada, 2006)、転移の選択性を説明することが、第二言語習得のメカニズム解明に不可欠であると言えよう。

このような立場のもと、本研究では対照研究、誤用分析、習得研究の3者を踏まえ、学習者の母語である中国語からの転移による中間言語としての日本語の実態を実証的に明らかにするものである。

2. 研究の目的

(1) 日本語学習者の中間言語データは、KY コーパスや国立国語研究所の「日本語話し言葉コーパス」、台湾の東呉大学の「LARP at SCU」、名古屋大学の大曾科研で作成した「話し言葉および作文コーパス」、同じく名古屋大学の杉村科研で作成した「華東政法大学作文コーパス」などがある。しかし、中国国内の大学において1年次から4年次まで日本語を専門として学ぶ学習者の縦断的な作文および会話コーパスで誰もが自由に研究に利用できるものはまだない。そのため、本プロジェクトでは中国の湖南大学の協力を得て、会話および作文コーパスを作成し、そのデータを一般公開し、研究の用に役立てることを目的とする。

(2) 従来の日本語習得研究では、学習者の母語と日本語の文法的・意味的性質の違いを踏まえずに、単に誤用の出現比率を問題にして議論されることが多かった。これに対し、本研究では日本語と中国語の文法的・意味的特徴の違いに着目し、対照研究と誤用分析に根ざした習得研究を行うことを目

的とする。とりわけ動詞および動詞述語文を分析対象として、日本語教育への応用を図る。

3. 研究の方法

(1) 本プロジェクトでは中国の湖南大学で日本語を専門に勉強する学生を対象に、入学から卒業に至るまでの会話と作文のデータを収集してコーパスを作成した。被験者は94人で、作文は19回分、会話は7回分収集した。ただし、被験者が日本語学科に転入してくる前や他学科に転出した後、それに休学や日本留学中のデータは収集していない。

(2) 上で収集したデータや既存のデータ、さらにアンケート調査などをもとにして中国語を母語とする日本語学習者の動詞および動詞述語文に関する習得研究を行った。その結果、以下のことを明らかにした。

(3) 本研究は学習者の母語を考えないで作り上げる日本語教育文法、日本語教育語彙に対して、中国語話者のための日本語教育文法、中国語話者のための日本語教育語彙を構築するのが目的である。このような目的を達成するために『新版中国語話者のための日本語教育研究入門』(張麟声著、日中言語文化出版社、2011年9月)における「対照研究、誤用観察、検証調査三位一体研究モデル」を研究の基盤とした。

4. 研究成果

(1) 湖南大学学習者中間言語コーパスの作成 (作文コーパスおよび会話コーパス)
被験者: 湖南大学外国語与国際教育学院
日語系の学部生 94人
母語: 中国語
調査時期: 2009年11月~2013年6月
収集場所: 湖南大学(中国・湖南省長沙市)

(2) 中国語話者の日本語動詞習得に関する分析結果

中国語話者の日本語の移動表現 (ジョンが家の中に走って入った) の習得を調査し、そのデータを英語話者のデータと比較した。Talmy (1985) の移動表現の語彙化のパターンによれば、日本語と英語は異なる類型に属するのに対し、中国語は日本語と英語の特性を併せ持った言語である。絵を用いた文法性判断タスクを実施した結果、中国語話者は習熟度に関わらず日本語型の文を容認し、英語型の文を容認しなかった。一方、英語話者は英語型の文を容認し、日本語型の文は習熟度の上昇とともに容認度が高まった。両学習者グループ間に母語の違いに沿った違いが見られたことにより、日

本語の移動表現の習得における母語の影響が明らかになった。

中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関して、韓国語話者と比較して分析した。まず漢語サ変動詞の受身に関しては、次のことが分かった。

1. 非対格自動詞の方が非能格自動詞よりも習得率が悪い。
2. 非能格自動詞に関する誤用はほとんど見られない。
3. 韓国語話者はほぼ一貫して非対格自動詞の受身を許容するが、中国語話者は非対格自動詞の受身を許容する場合とあまり許容しない場合がある。

この要因として、まず中国語話者の場合は、日中で同形語でも自他の異なる場合があるため、日本語の非対格自動詞を他動詞と誤解すると考えられる。一方、韓国語話者の場合は、非対格自動詞の場合に「漢語 - する」に対応する形がほぼ一貫して「漢語 - toeda」(この場合の toeda はほぼ「される」に相当する)になることに由来する母語転移であると考えられる。なお、いずれの場合も、非能格自動詞はそれぞれの母語でも受身にならないため、非能格自動詞の受身の許容度は低い。

次に、中国語話者に関して、日本語の「的」の使用条件を中国語話者の母語の知識を利用して教育するという点について考えた。その結果、最終的な結論はまだ出ていないが、中国語の品詞情報を中国語話者に適切に認識させることができれば、相当高い割合で、「的」の誤用を減らせることが分かった。

中国語話者の日本語のテンス・アスペクトの習得に関するこれまでの研究データをレビューしたところ、アスペクト仮説が予測するように、過去を表す「た」と到達動詞(死ぬ)との結びつき、動作の持続を表す「ている」と活動動詞(走る)との結びつき、到達動詞と共起して結果の状態を表す「ている」の習得の遅れが明らかになった。一方、中国語話者は、母語の影響の影響により、結果の状態の「ている」を使うべき時に「た」を使いやすく、結果の状態の「ている」の習得が(他言語話者より)遅れることも明らかになった。このことから、中国語話者による日本語のテンス・アスペクトの習得は、普遍的プロセスを母語の転移が後押しする形で進んでいくと考えられる。

陳(2009)のデータを中心に、中国語話者のテイル形の誤用を再検討したところ、この種の誤用は、(1) テイル形の代わりにタ形を用いる場合(皿が{*割れた/割れている})、(2) テイル形の代わりにアル/イル形を用いる場合(お客さんが{*いる/来ている})、(3) テイル形の代わりにタ形またはアル/

イル形を用いる場合(財布が{*落ちた/?ある/落ちている})のことが明らかになった。このことから、中国語話者が結果の状態のテイルを習得する際の困難点は、テイル形を用いて変化と結果の状態を同時に言語化することにあることが分かった。

動詞と結びつく日本語の数量表現「N+の+数量詞」、「数量詞+の+N」、副詞句としての数量詞について分析した。第一に、「N+の+数量詞」には「部分を表す用法」(「受験生の2人が欠席した」)と「同格を表す用法」(「山田、山本、山下の三名が執筆した」)があり、後者は「Nの属性を対比する場合」と「代名詞の内容を詳しく述べる場合」の2つの使用条件があることを明らかにした。

第二に、「数量詞+の+N」には「対比する場合」(「私は日本語学校で5人の中国人と3人の韓国人、2人のタイ人を教えている」)、「数量が少ないことを表す場合」(「たった一枚のカットを選び出すのに時間がかかった」)、「基準となる場合」(「みすじとは一頭の牛を調理してもわずか1キロしか取れない希少な肉である」)、「名詞の特性を問題にする場合」(「彼は若いのに、一つの確固たるポリシーを持っている」)、「特定性が関係する場合」(「生田神社の前に1本の道がある。通称、いくたロード」)、「全体性を表す場合」(「この映画を見て、1億2千万人の日本人が感動した」)という使用条件があることを明らかにした。

第三に、副詞句としての数量詞は他の数量表現とは異なり、使用条件は存在しないものの、全体性を表す場合には使用できないことを明らかにした。

以上のことを受けて、「三个孩子」(3人の子ども)のような「数詞+量詞+N」という数量表現について日中対照研究を行った。その結果、「数量詞+の+N」が表す「対比する場合」、「基準となる場合」、「名詞の特性を問題にする場合」、「特定性が関係する場合」は対応する表現があるため正の転移が予想されるのに対し、同じ「数量詞+の+N」でも「数量が少ないことを表す場合」や「N+の+数量詞」の各用法においては対応する表現がないので負の転移が予想されることを指摘した。また、副詞句としての数量詞の代わりに「数量詞+の+N」が使用される可能性が高いことが予想されることを指摘した。これは倉品(2009)で指摘されている正の転移、負の転移とも共通した結果である。ただし中俣(2013)では、(産出ではなく)理解においては母語の転移は見られないとなっているため、今後は学習者の理解面における調査が必要である。

日中で似た意味を持ちながらも意味的にずれる部分もある「も」と“也”、および「の」と“的”を分析の対象として分析し、中国語話者が日本語構文に対して母語転移を起こ

す現象を明らかにした。また、『日本語能力試験出題基準』（国際交流基金、財団法人日本国際教育協会編）に上がっている一級語彙7,800語に含まれる3,863語の漢語語彙を対象に、日中間における品詞性のずれについて考察した。

複合動詞に関しては、先行研究でも指摘されているように、学習者は作文でも会話でもあまり使用していない。そのため、アンケート調査によって意図的に「V1-V2」の結合意識を調査した。その結果、学習者は「V1」が「住む」や「座る」など二格を伴う意志的自動詞の場合に日本語話者とは異なる結合意識を起しやすいうことを明らかにした。また、「V1-抜く」、「V1-抜ける」、「V1-通す」、「V1-通る」、「V1-果たす」、「V1-果てる」、「V1-切る」、「V1-慣れる」のV1の特徴や各関係、本動詞との対応関係について分析し、日本語教育に資する多義構造、類義関係を明らかにした。

日本語の有対動詞の自動詞、他動詞、受身の選択について、湖南大学の学生の選択意識を調査した。その結果、日本語話者も中国語話者も「電池が切れて時計が止まった」のような完全な自然変化の場合には自動詞を選択し、「コーヒーにミルクを入れて飲む」のように人為的かつ意的な動作の場合には日中ともに他動詞を選択することを見た。しかし、「風でドアが開いた」、「火災で家が焼けた」のように自然物の作用による変化を表す場合、日本語話者は自然による変化と捉えて自動詞文を選択するのに対し、中国語話者は自然物の働きかけと捉えて「風がドアを開けた/風によってドアが開けられた」、「火災で家を焼いた/火災で家が焼かれた」のような他動詞文や受身文を選択する割合が日本語話者より高いことを明らかにした。また、「不注意で皿を割った」、「英語の単位を落とした」のように主体の不注意による非意図的結果を表す場合、日本語話者はすべき行為の不履行に焦点を当てて他動詞文を選択するのに対し、中国語話者は「皿が割られた」、「単位を落とされた」のように被害の意味に焦点を当てて受身文を選択する割合が日本語話者より高いことを明らかにした。これらのことから、中国語話者は有対動詞の自動詞、他動詞、受身の選択において、自発的な事態は「自動詞文」、自然や人による作用を表す事態は「他動詞文」、被害の意味を感じ取れば「受身文」を選択しやすいという傾向が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計26件)

張 麟声(2014)「日中間における品詞性がずれる漢語語彙について」、『中国語話者のための日本語教育研究』第5号,中国語話者のための日本語教育研究会,掲載決定,査読有

杉村 泰(2014)「コーパスを利用した複合動詞「V1-抜く」と「V1-抜ける」の意味分析」、『名古屋大学言語文化論集』第35巻第2号,名古屋大学大学院国際言語文化研究科,pp.55-68,査読無

杉村 泰(2013)「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について - 動作主の不注意による対象の変化を表す場合 - 、『ことばの科学』第26号,名古屋大学言語文化研究会,pp.153-170,査読無

杉村 泰(2013)「中国語話者の日本語使用に見られる有対動詞の自・他・受身の選択 - 被害や迷惑の意味を表す場合 - 、『漢日語言対比研究論叢』第4輯,漢日対比語言学研究(協作)会編,北京大学出版社,pp.275-286,査読有

杉村 泰(2013)「コーパスを利用した複合動詞「V1-抜く」の意味分析」、『名古屋大学言語文化論集』第35巻第1号,名古屋大学大学院国際言語文化研究科,pp.49-63,査読無

杉村 泰(2013)「コーパスを利用した複合動詞「V1-通る」の意味分析」、『名古屋大学言語文化論集』第34巻第2号,名古屋大学大学院国際言語文化研究科,pp.53-65,査読無

張 麟声(2013)「再び「V、V」と「Vてくる、Vていく」について」、『日中言語研究と日本語教育』第6号,『日中言語研究と日本語教育』編集委員会・好文出版,pp.25-36

張 麟声(2013)「试谈“汉语母语人用日语教学语法”及与此相关的几个问题」,彭广陆等编《日语语法教学研究》,北京大学出版社,pp.13-24,査読有

建石 始(2013)「日中両言語における数量表現の分布と意味・機能」、『中国語話者のための日本語教育研究』第4号,中国語話者のための日本語教育研究会,pp.1-17,査読有

建石 始(2013)「授業に必要な中国語の豆知識 第4回 結果補語」、『中国語話者のための日本語教育研究』第4号,中国語話者のための日本語教育研究会,pp.59-68,査読有

庵 功雄・宮部真由美(2013)「二字漢語動名詞の使用実態に関する報告 - 「中納言」を用いて - 」、『一橋大学国際研究センター紀要』4号,言語科学会,pp.97-108,査読有

稲垣俊史(2013)「テイルの二面性と中国語話者によるテイルの習得への示唆」、『中国語話者のための日本語教育研究』第4号,中国語話者のための日本語教育研究会,

- pp.29-41, 査読有
- 杉村 泰 (2012)「コーパスを利用した複合動詞「V1-通す」の意味分析」『名古屋大学言語文化論集』第34巻第1号, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, pp.47-59, 査読無
- 杉村 泰 (2012)「コーパスを利用した複合動詞「V1-果てる」の意味分析」『名古屋大学言語文化論集』第33巻第2号, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, pp.61-75, 査読無
- 張 麟声 (2012)「日本語の「の」と中国語の「的」における双方向習得研究(1) - 修飾部が指示詞であるなどのケースを例に - 」『中国語話者のための日本語教育研究』第3号, 中国語話者のための日本語教育研究会, pp.1-17, 査読有
- 張 麟声 (2012)「学習者独自の規則」とは何か - その形成にかかわる認知的要因からの分類の一試案 - 」『日本語/日本語教育研究』[3], 日本語/日本語教育研究会・ココ出版, pp.5-19, 査読有
- 庵 功雄 (2012)「文法シラバス改訂のための一試案 - ボイスの場合 - 」, 『日本語/日本語教育研究』[3], 日本語/日本語教育研究会・ココ出版, pp.39-56, 査読有
- 庵 功雄・高 恩淑・李 承赫・森 篤嗣 (2012)「韓国語母語話者による日本語サ変動詞習得における母語転移に関する一考察」, 『言語科学会第14回年次国際大会予稿集』, 言語科学会, pp.121-124, 査読有
- 杉村 泰 (2011)「中国語話者による複合動詞「V1-慣れる」のV1+V2結合」『中国語話者のための日本語教育研究』第2号, 中国語話者のための日本語教育研究会, pp.27-41, 査読有
- 張 麟声 (2011)「从“也”及日语相关形式“も”习得过程中的词序偏误看“母语迁移”的心理语言学条件 - 兼谈“双向二语习得研究”的意义」『海外华文教育』总第60期, 厦门大学汉语国际推广南方基地, pp.10-17, 査読有
- 21 張 麟声 (2011)「日本語を母語とする中国語学習者の「的」の過剰使用について(1) - 連体修飾マーカ-の日本語中国語双方向習得研究の立場から - 」『言語文化学研究 言語情報編』第6号, 大阪府立大学人間社会学部言語文化学科, pp.1-15, 査読有
- 22 張 麟声 (2011)「仮説検証型双方向習得研究について - 日本語の「も」と中国語の「也」を例に - 」, 『中国語話者のための日本語教育研究』第2号, 中国語話者のための日本語教育研究会, pp.1-14, 査読有
- 23 稲垣俊史 (2011)「中国語話者による日本語のテンス・アスペクトの習得について - アスペクト仮説からの考察 - 」, 『中国語話者のための日本語教育研究』第2号, 中国語話者のための日本語教育研究会, pp.15-26, 査読有
- 24 張 麟声 (2010)「「同類」の「も」と対応する中国語の諸形式との対照研究」『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号, 中国語話者のための日本語教育研究会, pp.1-14, 査読有
- 25 庵 功雄 (2010)「中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因 - 非対格自動詞の場合を中心に - 」, 『日本語教育』146号, 日本語教育学会, pp.174-181
- 26 稲垣俊史 (2010)「中国語話者による日本語の移動表現の習得について - 英語話者と比較して - 」, 『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号, 中国語話者のための日本語教育研究会, pp.28-40, 査読有
- [学会発表](計11件)
- 杉村 泰「中国語話者における複合動詞のV1+V2結合意識」, 中国語話者のための日本語教育研究会第27回研究会, 2013年12月21日, 名古屋大学
- 杉村 泰「日本語の複合動詞「V1-通す」と「V1-抜く」の類義分析」, 2013年上海外国語大学日本学研究国際研討会, 2013年11月9日, 中国・上海外国語大学
- 張 麟声「再び「V、V」と「Vてくる、Vていく」について」, 第二屆漢日對比語言學研討會, 2013年8月21-22日, 中国・福建師範大学
- 杉村 泰「中国語母語話者における自動詞、他動詞、受身の選択 - 自発性に対する認識の違い - 」, TGU日本語教育発表会, 2013年6月8日, 東京学芸大学
- 杉村 泰「中国語母語話者における自動詞、他動詞、受身の選択 - 人為性に対する認識の違い - 」, 2013年日本語教育と日本語学国際シンポジウム, 2013年5月26日, 中国・同濟大学
- 杉村 泰「中国語話者による日本語の複合助辞「～てたまらない」の許容意識と中国語の“～得不得了”による言語転移の可能性について」, 第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム, 2012年11月24日, 香港・香港城市大学
- 杉村 泰「中国語母語話者における自動詞、他動詞、受身の選択 - 人為的行為の場合 - 」, 日本語/日本語教育研究(第4回大会), 2012年9月30日, 日本・学習院女子大学
- 中俣尚己・清水由貴子・建石 始 パネル発表「実質語との共起に着目するコーパスを用いた文法研究 - 明日から教室で使える情報を見つける方法 - 」(建石 始:「たばかりだ」と「たところだ」), 2012年日本語教育国際研究大会, 2012年8月19日, 名古屋大学
- 杉村 泰「日本語の複合動詞「V1-果てる」の許容度に関する日中比較」, 2012年日本語教育と日本学研究国際シンポジウム,

2012年6月9日、中国・同濟大学
杉村 泰「事態の完遂・極限を表す複合動
詞「V1-切る」、「V1-果たす」、「V1-果てる」
について」、二一二年大葉大學應用日語
學系學術研討會、2012年3月17日、台湾・
大葉大学
張 麟声「「極端」の「も」とその対応す
る中国語の諸形式との対照研究」、第二屆
漢日對比語言學研討會、2010年8月14日、
中国・黑龍江大学

〔その他〕

ホームページ等
本プロジェクトで作成したコーパスの公開
<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~sugimura/class/class.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉村 泰 (SUGIMURA, YASUSHI)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
准教授
研究者番号：60324373

(2) 研究分担者

稲垣 俊史 (INAGAKI, Shunji)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
准教授
研究者番号：00316019

庵 功雄 (IORI, Isao)
一橋大学・国際教育センター・教授
研究者番号：70283702

建石 始 (TATEISHI, Hajime)
神戸女学院大学・文学部・准教授
研究者番号：70469568

張 麟声 (ZHANG, LinSheng)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：80331122

(3) 研究協力者

張 佩霞 (ZHANG, PeiXia)
(中国) 湖南大学・外国語与国際教育学院・
教授

蘇 鷹 (SU, Ying)
(中国) 湖南大学・外国語与国際教育学院・
副教授